

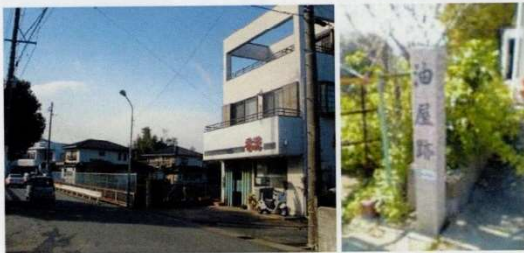
まごふくいつき
 医者孫福齋とお紺の油屋騒動
こいのねたば
 ～芝居『伊勢音頭恋寝刃』～

飯田 良樹

伊勢を盛り上げようと、仲間と昔の写真を集めたり、版画類を収集したり、町歩きや講演・ブログ掲載をして伊勢の古きよき時代を紹介して新たに伊勢を認識してもらっている。

その中でも宇治と山田に位置する古市は江戸時代から明治時代にかけての栄光は見られず、沢山あった遊郭や旅館は麻吉を残すのみとなった。昔の古市を知りたい人は古市参宮資料館に行けば、館長が展示物や資料を提示し説明をもらえる。

今回書くのは、江戸時代におこった油屋騒動で、油屋は日本三大遊廓の伊勢古市の中でも規模の大きな店で、部屋持ちの遊女だけで24人を数える妓楼油屋で起きた事件である。



近鉄鳥羽線上の橋

橋のたもとの石柱



作者不明 油屋 油楼

寛政8（1796）年5月4日の九時半（午前1時頃）、宇治浦田町に住む医者の孫福齋が油屋に立ち寄り、遊女お紺が酒の相手をする。そのとき阿波の藍玉商人の三人も油屋に立ち寄り、酒の相手に茶汲み女のおきし、おしか、それとお紺も呼ばれ、お紺は齋のところから藍玉商人の座敷に行ってしまう。一人になった齋は下女のおまんになだ

められ店の表口に出るが、おまんが預かっていた脇差を返すと、齋はいきなり、おまんに斬りつけ、指に傷を負わせる。そばにいた下男の宇吉が止めようとして指を切られ、その場にいた下女およしも斬りつけられ指と肩に傷を負う。さらに奥にいた油屋の主人清右衛門の母さきを斬り殺した。二階座敷で酒を飲んでいた藍玉商人たちもこの騒ぎに気づき、二階から一階へ降りると、真っ先に一階に降りたおきしが齋に斬り殺され、おしかも頭と肩に傷を負わされたが、お紺は店の裏口から表へと逃げる。藍玉商人の三人は血刀を持った齋を取り押さえようとしたが、伊太郎は腕と尻を斬られ、孫三郎は顔と肩を斬られる。岩次郎は腕首を斬られのちに絶命。宇吉は手に傷を負ったまま表に出て、人殺しと呼ぶが、齋は油屋を逃げ去り行方知れずとなる。二日後の5月6日夜、宇治浦田町の神主藤波家の屋敷内で、腹を切り刀で喉を突いた齋が発見される。しかし齋はすぐには絶命しなかったようで、宇治北山墓地にある齋の墓には没年が「寛政八丙辰年五月十四日」と刻まれている。

この事件は、伊勢参りに来た参拝客によって日本中に広まり、この事件を題材にわずか10日後に松坂の芝居で『伊勢土産菖蒲刀』として、7月には大坂で『伊勢音頭恋寝刃』が上演され評判となり、江戸時代から現在でも上演回数の多い演目となっている。

孫福齋は、鳥羽松尾の百姓の次男として生れ、鳥羽藩士の養子となって齋と名乗るが、さらに宇治浦田町の御師孫福九大夫貞知の養子となり貞陰と名乗ったが、九太夫は齋を医者にさせるため京都に遊学させ、齋が学業を修めると浦田町に家を与え、そこで開業させた。

お紺は文政12年（1829年）2月9日に享年49歳で没した。この年の5月、古市の芝居で『伊勢音頭恋寝刃』が『宝年菜種実』と外題を改め、初めて上演される。福岡貢を演じたのは四代目坂東

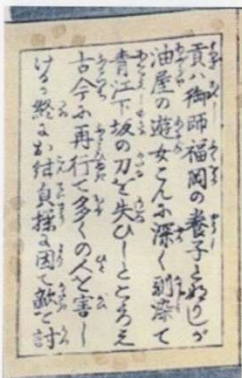
彦三郎である。初演から三十三年も経ってご当地物ともいべき芝居がやっと上演されたのは、事件の実情を知っている地元の人々にとっては齋がただの人殺しに過ぎず、それを美化して脚色した『伊勢音頭恋寝刃』の内容は受け入れがたいものだったからだという。しかしいざ幕を開けてみるとこの芝居は大当たりとなった。この大当りに彦三郎は油屋の近くにあった大林寺にお紺の墓を建立し供養した。現在古市の大林寺に残るお紺の墓であるが、その左隣には齋の墓が立っている。これは昭和4年（1929年）に二代目實川延若が寄進したもので、宇治北山墓地にある齋の墓を模して作られたものであり、このふたつ並んだお紺と齋の墓は比翼塚と呼ばれている。



浄土宗西山禅林寺派
高照山 大林寺



おこん齋の比翼塚



今様擬源氏 九 芳幾

「伊勢音頭恋寝刃」は近松徳三作で寛政8（1796）年7月大坂・角の芝居で初演。のち夏芝居の人気狂言になり、とくに三幕目「油屋」は縁切りから殺しへの段取りと技巧が洗練され、独立して上演されることが多い。

物語のあらすじは、伊勢の御師（おんし）福岡貢（みつぎ）は旧主の息子今田万次郎のため、銘刀青江下坂の詮議に苦心し、ようやく刀を手に入れるが、貢の愛人油屋のお紺は刀の折紙を藍玉屋北六から奪うため、北六になびくとみせて貢に愛想づかしする。怒った貢は青江下坂の刀で北六や仲居万野など多くの人を殺し、切腹しようとする

が、お紺と旧臣の料理人喜助に止められ、刀と折紙を持って万次郎のもとへ向かう。

ほかに、序幕（相の山、妙見町宿屋、追駈け、二見ヶ浦）は、貢が刀の盗賊杉山大蔵、桑原丈四郎を取り押さえるまで、二幕目（太々講）は、貢が太々講の金を盗んだ罪を着せられようとするのを伯母お峰に救われる話で、まれに通して上演されることもある。なお、「油屋」は義太夫、常磐津にもなっている。

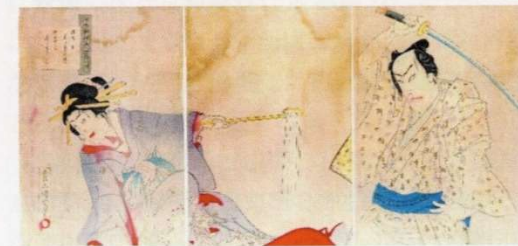
（以上ウィキペディアの油屋騒動と伊勢音頭恋寝刃を参考にした）

収集した浮世絵で「伊勢音頭恋寝刃」を見てみると豊国（三代目）が多く扱っているのかまたは買いやすい値段なのか沢山集まった。





豊原国周もかなり出しているが、収集は5点





守川周重



大坂で流行った中判（大奉書の4分の一。大判の横2つ切り。縦19.5cm×横26.5cm）の浮世絵にも「伊勢音頭恋寝刃」がある。

豊国



一勇齊国芳



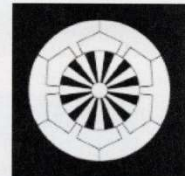
歌川広貞（五粽亭）



歌川芳梅



なお、油屋の紋は九枚笹、備前屋は源氏車



ほとんどの浮世絵の提灯絵柄が備前屋の源氏車になっている。これについては『三重医報』第708号「油屋おこんと浮世絵」を参照して欲しい。

浮世絵の横に○を付けたのは、上演された伊勢音頭恋寝刃を浮世絵にしているの、役者名（尾上菊五郎、沢村田之助、坂東彦三郎など）がはいっている。国立劇場で平成27年10月に上演された時のパンフレット中の解説「伊勢音頭恋寝刃と浮世絵」によると役者名が入っていないが上演に際して出された浮世絵で役名と役者名（伯母おみねは三代目嵐瑠寛、福岡貢は八代目市川團十郎など）が説明されている。この浮世絵の横に●を付けた。

芝居の興行引き札（芝居番付）も収集出来た。

明治35年道頓堀中劇場での興行



大正6年木挽町歌舞伎座での興行



伊勢音頭恋寝刃の芝居絵葉書も出ているが、残念な事に発行年度や役者名が入っていない。



昭和28年7月に菊五郎一座猿之助一座合同大歌舞伎が伊勢音頭恋寝刃を興行したときに貢・尾上菊五郎、お紺・尾上梅幸などのプロマイドを作っている。



昭和35年6月に歌舞伎座では市川海老蔵・尾上梅幸などが伊勢音頭を興行した時のプロマイド。



昭和16年8月の松竹の興行小冊子。扇雀、成太郎、段猿などが出演



昭和55年6月梅田コマ劇場、「血染舞伊勢音頭」のパンフレット 貢を田村高廣、お紺を藤間紫台本は与吉役の瀬川新蔵用



昭和63年6月中日劇場、パンフレットとチラシ おこんを森光子、貢を中山仁、お鹿を草笛光子



伊勢音頭恋寝刃は歌舞伎のみならず、文楽でも公演され、文庫本や検証本などが出版されている。昭和51年7月道頓堀朝日座、文楽のプログラム



明治15年2月御届 大西爲次郎
『伊勢音頭十人切』上下台本



昭和34年9月 伊勢叢書第1集として『伊勢音頭恋寝刃 実説油屋騒動』浜口良光

古市遊郭や遊女、油屋騒動の顛末、公演など詳細に解説



コロムビア製イーグルレコードより歌舞伎劇「伊勢音頭恋寝刃」が発売されている。

レコードは78回転のSPレコード



レコードには解説書が付いていて、實川延若が貢、中村魁車がお紺など配役、台詞も記載されている。



油屋騒動の経緯と「伊勢音頭恋寝刃」の歌舞伎内容および収集した浮世絵・写真・パンフレット・レコードなどを提示した。

この文章を読まれて伊勢に興味を持って頂ければ有難いです。

眼の保養に



伊勢女 揚州周延